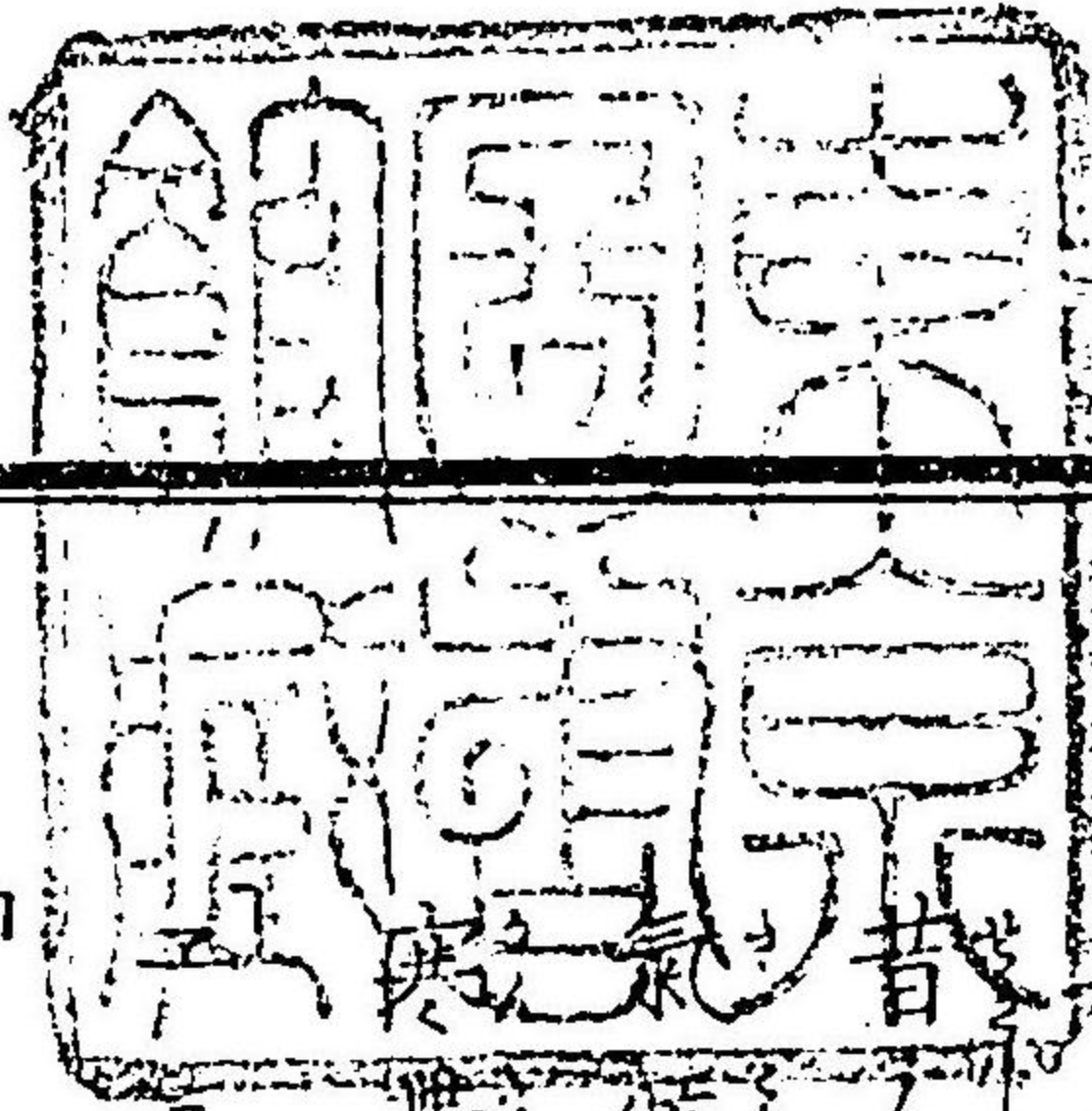


特31
598



久保扶桑譯世界奇談目錄

卷之一

昔人塔以建之蒼天ふ達とんと企きま事

候大略此事

寒帯天光の事

スキモ犬いぬの棧かきを牽ひしむ事

スキモ雪ゆき乃窟室くわくむろに住すむ事

附つ白熊しろくまの事

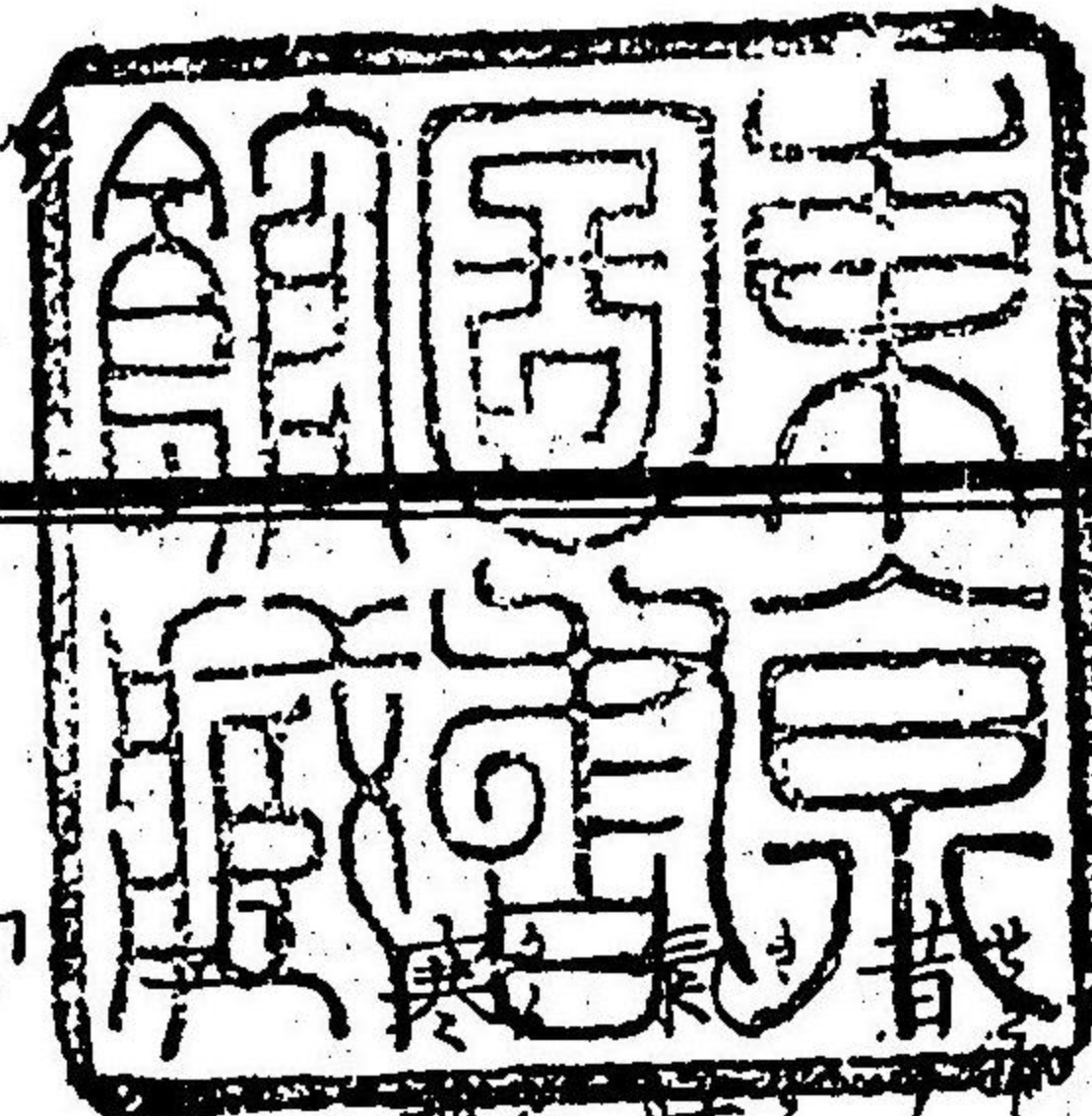
スキモ海豹かいひょうを捕とる事

グリーンランド人じん鯨くじらを獵とる事

久保扶桑譯述

世界奇談

明治八年新刻



久保扶桑譯世界奇談目錄

卷之一

人塔トウ以建キ蒼天ソウテンふ達トウとんと企キ事コト

大略ダイリョク比事ヒコト

帶オビ天光テンカウの事コト

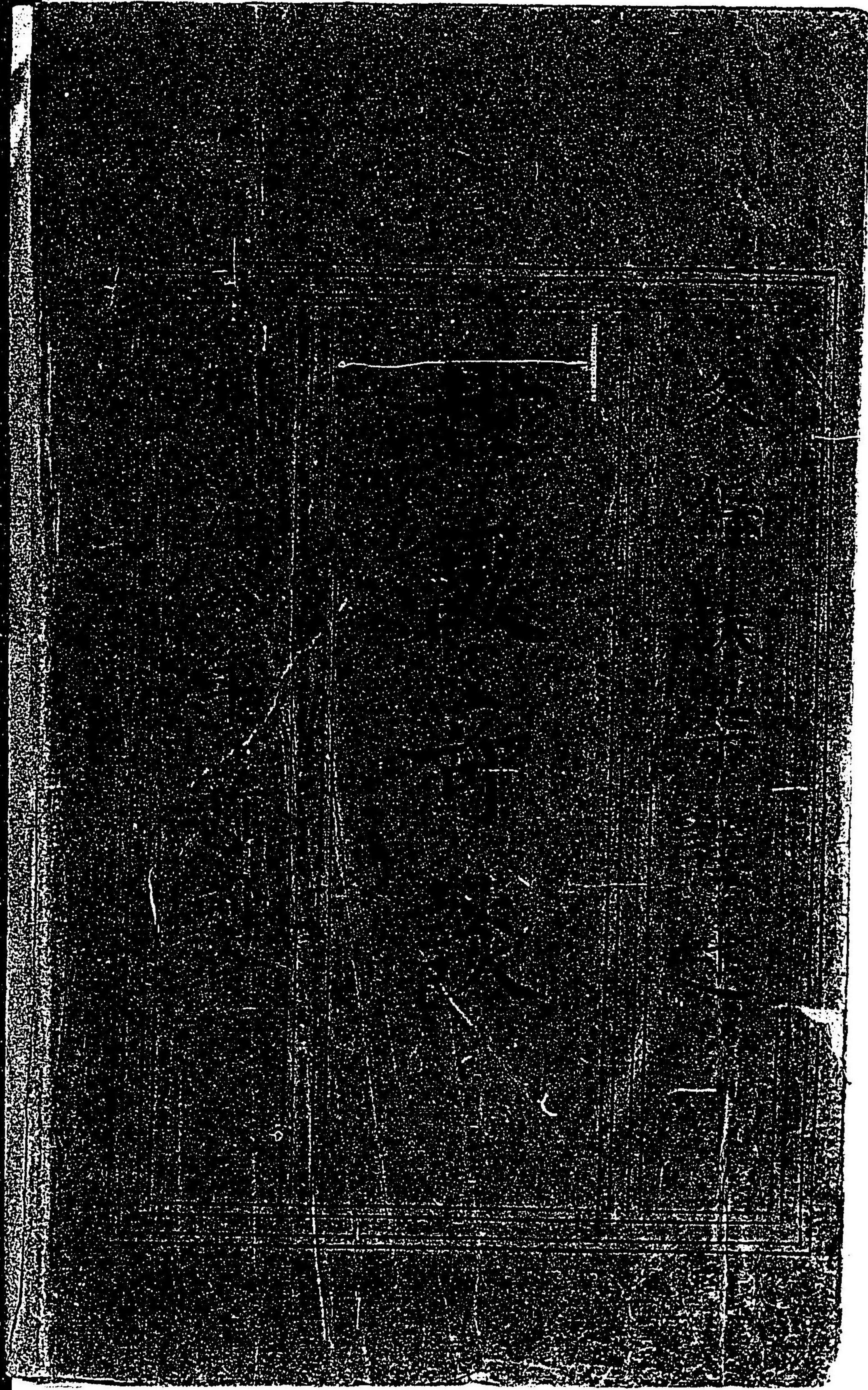
ススキキモモ犬イヌとト換カとト牽ヒしシるル事コト

エエススキキモモ雪ユキ乃ニ窟室クツシツにニ住スむム事コト

附ツケ白熊シロクマの事コト

エエススキキモモ海豹カイヒョウ以テ捕トるル事コト

ググリリーーンンラランンドド人ヒト鯨クジラとト獵シるル事コト



グリーンランド人の事
グリーンランド人海牛と狼戦の事
ラプランド人あぶら馴鹿の事
フランキリンの船氷母團の事

卷之二

アイスランドの熱泉并ヘクラ山の事
アイスランド大畧の事
潮流の事
北極海の事
銅色人の事

アメリカ土人小兒以肩負具の事
銅色の戦士藥囊以所持の事
アメリカ土人未熟乃玉蜀黍以取て大に會
食する事

アメリカ土人水牛以獵獲する事
アメリカ土人老後の事
セダール沼のあまは鷺の事
烟草及馬鈴薯の事
野鳩の事
海狸の事

「ホガニ」樹の事

木綿の事

卷之三

砂糖竹の事

「コロコ」の事

「ブラジール」深林の事

「アメリカ」土人饗飲の事

獲の事

「ブラジール」景況大略の事

「アメリカ」土人倒卧し多飛鳥以射る事

「猿」橋以作りて河を渡る事

「蟻」の戦争の事

「食蟻」獸の事

「旅人」木葉の逍遙も亦を見る事

「小鳥」難以避けて河流を横たふる枝上り巢

「我」作る事

「木脂」の事

「發電」氣鰻の事

「舟人」虎口を免れて頗る生命を保つ事

「黒奴」金剛石以探索する事

銅色人虐疾の藥發見事

ブラジール生む大木事

アメリカ土人吹箭筒製事

大蓮乃事

小兒の風呂事

パタゴニヤ國の事

久保扶桑世界奇談卷之一

書

目

曾て地球上の生活せし人々を何ぞ此國も同ト

言葉採用ひるまゝ一世代變遷必從以傲慢暴惡

不陷り面々自々前世世界の洪水乃為る覆没せし

人畜中も亦滅亡せし由とわかると又とわか

る大患此何ぞとやせん其危難代遁んた

蒼天に達する高大の塔を建造んと企てり造

世界奇談 卷之一

久保扶桑 譯述

物者此の事以知れし先地球再ハ洪水乃患以
有るを以て告玉ひくハ人々御詞お志
が以奉り且箇様を以高大の塔を到底人力を
成就し難き以て知れし苦あるハ無智頑愚乃者
也もをねむ何の思慮もなき蟻乃如く群り来り
既其造営を以始先を造物者深く其愚を
懲み容易く此工業を停ゆんた先直ち諸人の
言葉以て以相違を以て先を以てし
て甲言語を以て答る事以てわを以て
開けハ甲又辨ずる能くハ俄に言語通せし意見

了解せし故に人々忙然果て造営し以て塔を其
儘に捨置き皆已む此本國へ歸りて此以後
イギリス人ハイギリス語を用ひフランス人ハ
フランス語を用ゆる如く各國互に違ふは語
以用ゆる事と見えたり
凡そ地球上日月以てて所霜露乃落る處人物
皆同等の様を以思ふるれども全く左に右に
如何とを以極寒の地あり極熱乃地あり不寒
不熱中和を得る頗る人身不適宜の地あり以て
各地乃風習容負及び宗旨等都同一様なりを

上等をば邦國に於ては人々正神を奉り經典
を讀誦し事物の道理と講究して人智を開明し
人間に通義と辨知を修め最下の地方に至りて
も奇怪の皮毛をとりて身衣纏ひ頗る整まつ此
物と食ひ終ふ口腹を養ふ事を知りて之を以て人
たる此道理を知りて甚ど劣悪をば風俗あり然
し何處の國にても人の住る程乃地味はかを
らば造物者より必要なる物品を充分に賜與し
玉へて斯の神乃鴻恩を蒙りて人の過活を
ふ乃土地の形に記せし工業を起し之を地味

も今尚一二乃建物乃墟址煉磚等の累々たる所
をアラビヤ人は是を「ハバル」と呼ぶ去る壊碎を
言ふ義あり

氣候大略の事

凡そ地球上に極熱極寒又在中和を得る等種々
乃地あり先づ爰に掲ぐる所の地圖に中央に引
たる線を赤道と云ふ然し此地に何等の境界あ
る小何とされども船艦此所に至れば赤道線下
に航をば中称へ船人皆衣裳を粧飾し刻子に乘
移りて船魄を祀し其内一人を「ゼン宗」小海

Earth to the kind

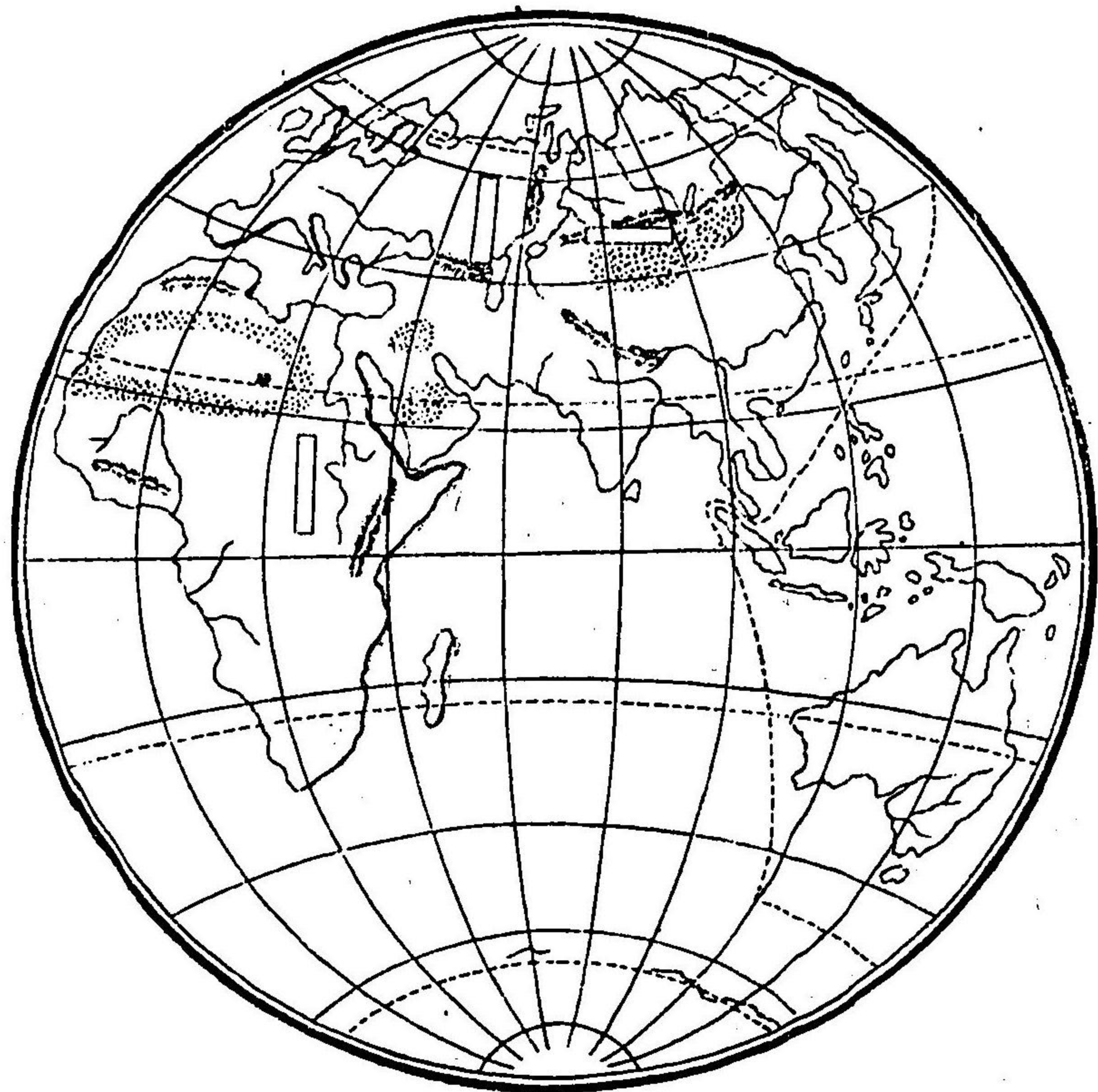
1. 地球



世界新談 卷之二

四

地球の圖



世界新談 卷之二

神々しく肖像したる子ブトシ乃おとく服飾
或る甲板上にあつて雜劇等と彫る頗る滑稽な戯
なり又赤道兩側乃點線或回陽線と名付く此以
内は熱帯といへイギリスを以て其氣候甚と
あつく大なる椰子を生ず其花乃大目して美を
る言語も述へがごとく其他産物は所の珍禽奇獸
を云ふはあつた佳木名艸枚舉ふはあつた
を抑此地方に於けるや樹木も冬枯る氣色を見
る古葉落るは前より新葉を生ず常は綠色を呈し
陽線乃外を暖帯と云ひ日本支那やウロップ諸國

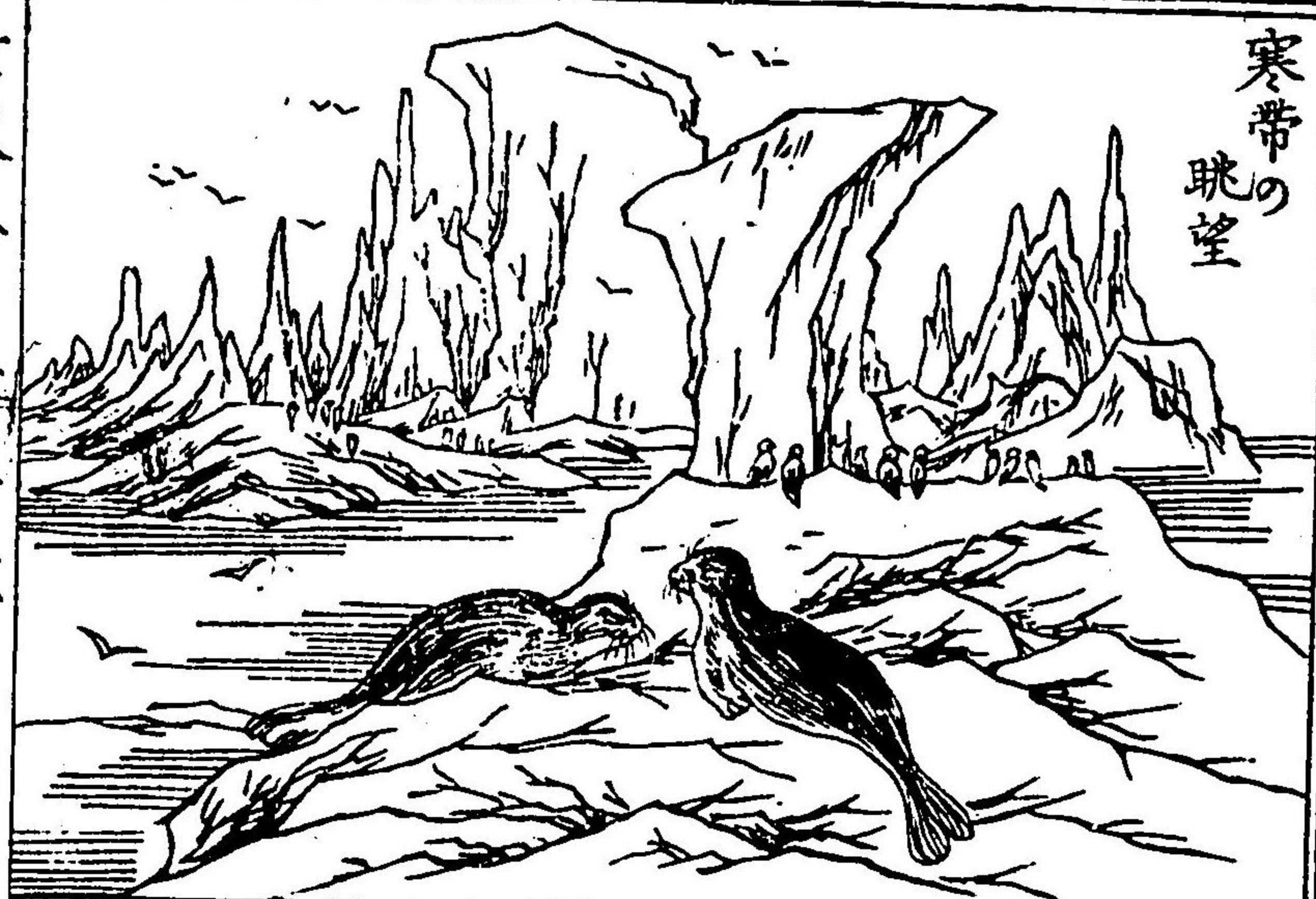
乃おとくは皆寒熱を以て中和する人民十分
産業を勉むる事を得る故に廣大の都府と彫る
諸工を器械を用ひ甚と氣味よく生活が営
る蓋しヨーロッパ諸國は暖帯の北部に屬し南部
は過半洋海にありて多く此國を以て此外南北兩極
の周圍は寒帯乃地方ありは南部は水海あり
る方今に至るは國民の生活は僅に北部に
生活する人種あはれども家を作して街衢を成
す國中は移轉し小屋の内は半周を送り耕
たる田地を多く物を製するは器械よくと詠誦

もなき此書籍を凡そ寒帯地方乃氣候多しや
周年嚴冬のじやく海面氷の積累たる恰も山岳
の類して寒氣乃凜烈るは殆ど眼氷り指墮るふ
至る是れもつ多偶奇功と好む此人奥地探索の
志を企きとも寒氣と氷雪中阻隔らるる竟
ふ志以達せし人なりと云々

寒帯天光乃事

天より多く此光氣あり或る點躍飛進し或る弓形
と模照し其色赤黄若くは紅紫みして偶然これ
以見ると紅と眩暈を伴ふに至る寒帯地方におる

寒帯の眺望



て最も焯灼を伴ふ則ち
おる地方に生活せる人
民と保存せるの天恩と
云ふなり皆て此地方に
生活せる人民乃愍然を
する冬日快晴といへば
も數周乃間太陽を見
ふと何と云ふは是も太陽
乃地平上に出ずは由
あり此地平といへる

則ち一つ此岳に登りて見渡す小遠く此距離
 かみく蒼天の地を觸るおとく見ゆる線々
 了我々曉に起さば始て東方の微白を見尋す日
 乃出現する三才乃童も知る所あり然るに此
 寒帯乃地方を日中と思へば項僅に日本國の黄
 昏に薄光あきざりも終に太陽乃出るる萬點此
 星辰を夜中の光とく炳なきまじり且つ天光を
 出没變化千状万態ありて奇状呈し美を現せ而
 して人民あきざりて往來しこれより上りて百
 般の工業営り若し此地を如此光明あり



寒帯の天光

んむ住民いづれんぞ生
 活と保つて得ん皇天の
 民人保護を依至らざ
 り所あり尊をぎふるけ
 んや泰西人此天光遠
 北光と唱へ又々舞光と
 も云へり
 エスキモ犬小様を牽
 しむ事
 北アメリカ洲寒帯極北

乃地方居住も人種とエスキモと云ふ軀幹長
 大なる性残忍ありて殺伐を好む常より矢以
 携へ漁獵以て業とせり此地素より酷寒あり
 て不毛の地なれども幸に造物者乃深恩ありて
 て産出せる動物の二三種あり即ち熊および海
 豹と名付けし魚圓頭魚尾乃を以て土人こそ
 以て獵獲し肉を食料とす鐵と凌ぎ皮革を衣服
 又冠靴の製作で寒氣防禦具とあせり然し
 から第一要用なる動物は犬と勝るを以て常
 小馬乃換りし使用せり却説此土人を永住の家

室を作らざる故に街道と云ふ者もなれ他に行ふ
 るかありて杖を乗せて數頭の犬を牽く則ち
 番を示すおとく杖は大鯨の骨以て作り海豹
 乃皮をとりて包み紐又同く皮を用ひて第一
 小疾走を以て魁首を名付け其姓鋭敏とて左
 右前後緩急能く驅人の指令を守り誤解を以て事
 なし又途中にて「ナレヌ」と言ふ声は懸るに
 更し急走を以て此地よおあま白熊の名を以て土
 人平生食料を得んがたは獵り出する小此犬甚ど
 白熊と惡みおこれ喫伏する事を好み驅人これ

エスキモ人
犬小雪車以
牽しむ



と知り故に急め馳せしるんとまは時を熊の見
えぎほも若く如く此叫を此を主亦如何うあを
る大雪或は暗夜に逢ふや以へども魁首地上を
喫む少くも先の途に誤らば小舎に歸るをいふ
かよふに緊用にも此をねども土人の犬を取扱
ふに至て深切ありて冬日ぬる土人の食料も十
分ありざる以て犬の飼料も亦至て少く婦
人と友てまき以て愛し懇懇に食物をも與へし
疾病ある時ハ卧床と共にし手當をせり夫
も故に犬の婦人と慕ふと恰も赤子の慈母を

暮ふがおとく其聲以聞バ尾と掉て集り来り行
 處を々々從ハきほとや唯此犬乃醜體なる
 ち接と牽て馳るふ路傍ふ一片の食物の落たる
 以見ても忽ち其所に停り敢て駆人乃鞭撻と厭
 せば又小屋にのりたる瞬間息に間以偷て主人
 の食以喰ふんとはきねをふや土人日の半は小
 屋より犬を追ひ出せぬ費せるといへり此の如
 き功勞ある犬乃常に饑と苦しむ可憐といへど
 も犬の食中不厭は畢竟土人此食料満足せざ
 る為をばべー嗚呼土人乃食の闕乏を寒帯不毛

乃地方に住バを豈懸然と云ふや

工スキモ雪の窟室に住し事

附 白熊記事

工スキモは壯觀なる家室を建て以知らば少
 ぶ冬に間ハ凍固たる雪以割断し幾箇も重疊
 せしを造りて窟室に住し又時ありて他國より
 風波ふきたり海岸に漂着たる材木を以て先
 小舎以作るもあまんと至て稀を以て示す如
 く雪も十分凍着せしをねむ全冬を瓦解の憂
 あり然し人畜はる燈火乃温度より室中

Figure
strange

エスキモ人
雪の窟室
を造る



少くも溶解を爲す所あり
るも新しき雪を以
て補ふ易し窓は硝子
をもちき氷の一片
と用ひ常々油を盛り
るは小器ふ小さき燈
心は放しあね火城
點し暖氣を取らば
ぬて敢て焼火も爲事
ありやうへとも室中

乃温度を意外に出入り偶割素を食らば
焼器以用ひて蒸せせ多く生肉好なり素
より机索椅子此類多く室内乃四隅に雪を壇
を築き床乃よみ多し上は皮袋覆ひ起臥せり
偕て氣候漸次暖和を向ひ雪室溶解を始むるに
土人皆出づ張幕を居住す

白熊を食らば其性太猛く是又同上の地方
を産せり土人は是を氷熊と呼ぶハ多く氷中
に住むる者あり毛白く光澤あり四足
とに鷺鴨の如く水かきあり水中を泳ぐと

set white Black
The white bear
catching a seal.



魚も異るべし又陸地
奔走一其疾こそ人の及
所みゆらば魚鳥及び
馴鹿を捕へて食とあせ
り圖る氷の上へ倒臥
る海豹を捕へ顔食とあ
と罵せり海豹は頗る用
心深きとけなれども熊
の地上で踏む毫も足音
乃ぞぎはゆを折と擡殺

せらほとせ言へり

エスキモ海豹を捕ふ事

海豹も平生寒帯地方乃水中に浮遊一時あらず氷
の上より登りて倒臥を爲す事あるも其性狡
猾ゆへに些細の物音あねを忽ち水中に潜没せ
り然し其形體肥太ゆへ卒尔不舉動を難き
以知り常々氷を穿ちたる穴の傍を離るる瞬間
も難を避るこぞ要せり土人は此所彼所とか
多るより耳に傾け若し氷がうがつ音に聞
むれば膚がさくは寒氣が厭はる雪の小防牌が

海豹



作り其蔭に蹲踞し覺此
鎗と手許に引付令や出
ると待かきさりかくを
も知はや去る波の水は
穿つ海豹の命を消るに
近きけるかゝる時不
も獵士の身は寒氣に堪
兼て震慄をがら若しや
己が裾に音の何らん去
や恐怖を膝に縛り呼吸

凝して窺ひ居る折もあれ海豹は己の穴
を穿ちて攀上りんを身をを獵士の槍にぬり
大喝一声力は極えて海豹は刺通し手早く腰を
纏ひおきよは網を以て矢庭にらねを縛り揚げ
頓て吾家も持かへきり儲小室も残り婦人小
兒も貯置たる食物もまじり尽きて渴まねば
少くも雪は溶きけすべも知を以て何れ
ちは夕暮り背あつた帰る件乃獲物を見りより
一家獲生したる心地し其悦び何れも
よつちもあく婦人を先祝の調理ある小兒を肉

Chapter
This sentence is which
translated from Third Q.

成るはて口ふ含み恰も氷砂糖乃ぐやぐは是成甜
是り

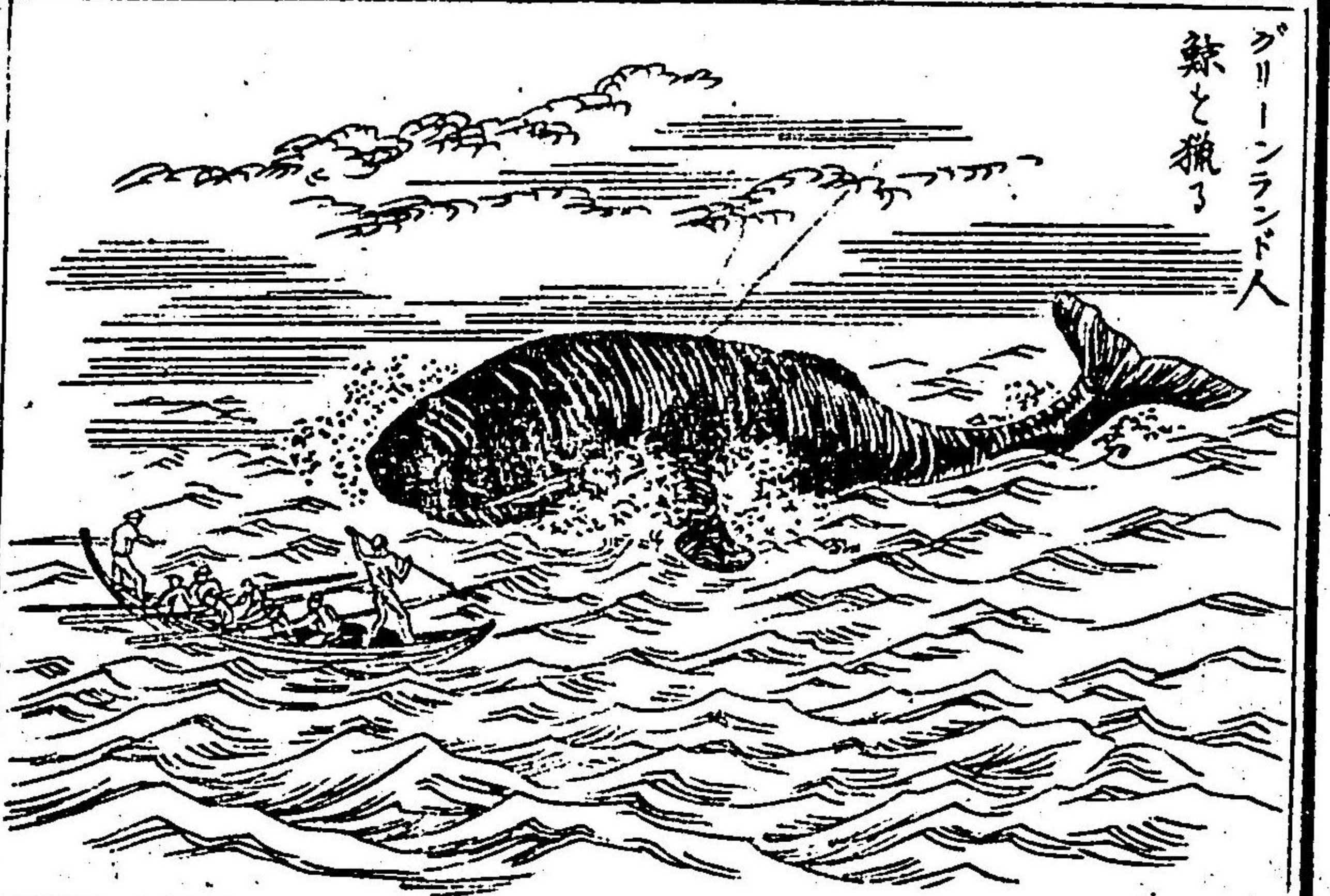
グリーンランド人鯨を獵る事

抑世界に現在もは動物の中めて鯨より大なるは
そはあく殆ど一箇の島嶼と異なれあり種
類許多ありやいへども大同小異なる世人容の
相似たる成以て魚と稱せれども全く魚にあらず
ど多自より一種の動物なり其證は魚類の血の
温あるものとなく又子成乳養をば鯨ハ其血温暖
ありて其子成乳養す且空氣成呼吸して生活し

頭上二箇の息穴ありよ水の如き物成吹出
る人乃知る所を去る則ち體より吹出せる
温息外部の新鮮なる冷氣に觸れ收缩して霧の
ごとく落る物を屢空氣成呼吸する為水表面
に浮游せり怒りて吹る時其聲冷騰しく数里
以外に聞ゆ食成求めんとすねば殆ど大さ鱈の
半分せし洞のおとれ口成開きを游走し上腮よ
り下りたる房乃如き毛舌頭に陥り来る鮮魚
乃捕活を遮り其數の満ち高む以待ちておち去
るは吞却す如斯と云と數回始てて口腹を満

世界奇談 卷之一

せり亦北鯨を甚ど其子以愛し若し危難に罹る
 以見まば己れの身以顧む近づき来りて救はん
 とん獵士も是を知り故北鯨を獵せん為り少き
 鯨を見まば態とあはれり鉾を投込て疾を負せ
 北鯨の来りて待て捕へんやん此北を膏氣最か
 多くしと牡より一層佳きはあり獵士も殊
 小之を賞せり圖る獵士の鯨を鉾を投掛りて現
 へせり鉾の柄より長き網を付端以聴と船に結
 び付其網を巻きたる車以輪軸と言ひより鉾を負
 たる鯨の海底より潜道とほり従ひ輪軸の回轉甚速



グリーンランド人
鯨と獲り

ありて獵士誤て此網に
 是以纏事ありを忽ち船
 より引落せしれ鯨と共に
 海中に沈没し乃患あり
 又大鯨尾を振ふて船
 を覆没せしむるゆり故
 小船人常に恐怖しを慢
 りに接近せざる既ありて
 鉾を負たる鯨も一時海
 底より道沈せしゆも空

氣は呼吸をせられ絶へ難き以て再び水面に
浮出を獵人老練たる事なれば頃て結付
たる綱を便す小鯨も近寄り他の鯨と投かく
と首度乃おとす如此も再三再四終る鯨は
疲勞す或待て全く是を殺せり此地方も住も亦
土人とグリニランドと云ひ前も載せたる
エスキモス類は頗る鯨を嗜好み如此危難
犯して是を獲んと欲せり

グリニランド人の事

圖に北亞米利加洲乃東北に當る一大地方則

グリニランド人舟行乃景況と寫り此地
方亦又海牛と言へる物あり鯨の一種あり上唇
亦長き牙あり土人夏の中るとれば捕獲を以て
營業とせり船を鯨の骨以て製作し海豹の皮
亦之を以て廣狹長短よく綿密に張合せて一
滴乃水も漏り入る事なく日和乃りき以て聊
苦勞と思ふ激浪の來るを船を震さんと云
時を兩端に廣き一挺乃楫を以て是を避る其
と容易せり此地方を材木も稀あり所なれば大
なる石以て家を作り稀に海辺に漂着たる木片と



拾ひ集めて家根と作る
 故に大木枝貴重
 室中に温氣を生じ
 巧工スキマの如く燈
 蓋を用ひ決してそれを
 焚く事数戸に眷属
 少く小室を分ちて一家
 同居を窓ありても更
 小空氣の流通を窮窟
 夜昏黒定より這入這

出たり海豹を獲て終日生肉を調理し
 客を招待して饗應すといへば此地は穀物を
 くも食料とすは唯馴鹿の肉を食す
 此獣も此地に生る人々馴鹿を故に乳汁を取
 るあまも唯獵殺して衣食を供せり如此生活
 亦法以て百事闕乏く不便利なる地方に人あり
 是イギリス國の如く繁華あり多周年太陽を見
 ずはの期をく美麗な家を居住し且獵を以て成
 せし衣服飲食の豊饒を羨むを願ふを以て
 らんと思ひし不曾て此土人兩三輩イギリス人

来る居るを以て珠の外郷土と悲慕し終る苦痛
不堪と云ふ帰りにて

グリーンランド人海牛と浪戦の事

又此地に猛悪な無数の動物あり中なる海牛と
云へる物ありある海草及び分類を食す此畜
を幸ひ前歯を以てよく人を喰ふ乃害を
せんほど頗る鋭利なり大なる牙あり氷の
上岩多しに登らんと欲せば時先此牙を打込
て後全身よりやく這上り又白熊の獲ふ事
はけぬを以て捍禦をいふ土人屢海牛の海岸

お倒臥するを窺ひ獵獲せんとすは物音
驚きたる海牛を起上り海中に飛入り其挙動
乃神速なほ中々人術の及ぶ所なれば土人
魚を用意したる片舟に打築り跡を慕ふと潜出
せむ海牛は水中にありて勢まじく猛く一同輕
舟は目懸て驚ひかり牙以て海底に覆没せ
し先んずる舟人ひとり船を轉じ是れ避け
或る進で撃かり或る退て此を禦ぎ其形勢恰
も兩軍の激戦をなす異なれば即ち浪戦の
景況を寫せり土人の如此危難を犯す海牛は



グリーン
ランド人
海牛と
浪戦す

獵捕をなすは獨此肉
を嗜好乃と珍ら其牙
の白く多光澤ある象牙
此おしく皮の厚柔軟を
製して良善な革を
あま都る其體捨る所を
く頗る貴重なはと此を
まはるる

グリーンランド人および
馴鹿乃事

グリーンランドヨロツハ洲乃内を北寒帯に
屬せし土人の軀幹矮少を常々小舎を造
らば張幕以内の起臥一鳥魚獸肉を以て食料と
なせし周年一定の地に住まば山野を轉住を其
所以に此地方夏に至ると殘酷の毒蠅を生じ住
民亦有益たる馴鹿を刺せり此畜は其苦痛を絶
ず水火以て侵して馳走を終る寒き山嶽を道
たふし土人も止火を得て共に山中に居住す
來るハ蠅乃憂ひなりを以て一同馴鹿を導
て岳を下りて再び張幕を平原に移すと此を

此張幕此内なる甚と不潔中一多燈臺蠟燭の
かたふ總て焚火と用ゆまざるも煙突をく上
邊に小窓を穿て穴あねども煙容易く昇散
さば土人の面部黒くふもおふれり甚と醜
く登る此張幕此内なる甚と不潔中一多
燈臺蠟燭の



群ともひき
く馴鹿乃一
ふ憂る色ふ
なとせも更
登るを臥せり如此甚と貧窮を汚穢き過活と
く何事と事営之夜床の上へ廣げぬ皮を
用ひて

白る者る自
ら無限有福
を自得せし
圖ふ掲くは
る此土人馬
と持とぎた
故了馴鹿代
使用ひて雪
車と牽しむ
る所を全駕

Reindeer

グリン
ランドの
馴鹿



を以て細き紐を用ひ又手綱のごやうく角小素と
結廻し數十里の場所も往復せり此土人夏此間
を漢獵以營求み冬天に至り山海悉く氷雪を履
せられ山野を獵する鳥獸をく沿海を漁する魚
を多くして衣食已に尽るに至るは一頭乃馴鹿
を屠殺し肉を食料を皮を衣服に製せり然
るに此の地毎日旦昏此馴鹿を以て來りて乳
汁と名ほるに牛乳よりも濃く味殊に美なり
婦人の生乳を好むに乾酪を製して用ゆるを云
り此馴鹿を苔の外一物も喰むに嚴冬に至るは

下谷一雁或
心むき中

如何なる大雪風と虽も郊原ふゆりて雪は底に
生じゆる苔を求きて食とせり若此地方ふ如
此馴鹿を令んと土人一朝に斃るは無量の天
恩をよみて此動物あり以て人民生活以營む事
と得るは此土人の馴鹿より衣食と供給し養ふ
といふも溢言ふあるべ

フランキリン乃船氷を圍む事

イギリス人を能く耐忍恒くして物事を考究
明なる事と好む既に陸海を鉄道海を蒸氣船
及び傳信機と始る其外物も製作も千種萬様

乃機械當今世界一般有益必用の物哉發明せし
 とて枚擧をほして違非以然るより又別に開發せん
 を欲するはこれあり是は西北海道といふ地球
 の幅は開闢るべし二箇の大洋を見らる一は東西
 洋といひ一は北太平洋中名づく大西洋より太平
 洋の航をほる南アメリカ州乃ホルン岬を廻る
 ぎれむ必ずバブラカ此喜望峰を帆走る事通
 例の船路をねど英人更に意想を去らして北アメ
 リカ州極北の海岸を添て太平洋を達すべし果
 し是は航海をもむる海路短縮して大に便利を

るがやかんがへ最初豪氣の者兩三名あり互
 に此水路を探索せんや約束し各其用意を
 て航海し多く此海峡江湾と發見しそれ各自
 己の名を蒙りせしむる則ちバソフイン江ホドソ
 ン湾及びカウエス海峡等是より此邊を登り
 寒帯を過ぎ渺漫たる海面ハ悲しく凍圍り夏日
 亦至て少く溶馳せざ寒氣をイギリス乃兼冬よ
 り猶烈しく浮漂る氷の大塊を恰も嶋に如く岳
 多類し其色藍緑若くハ數色は混じり透明美麗を
 事水晶亦異なり頗る壯觀なり中虽も船艦

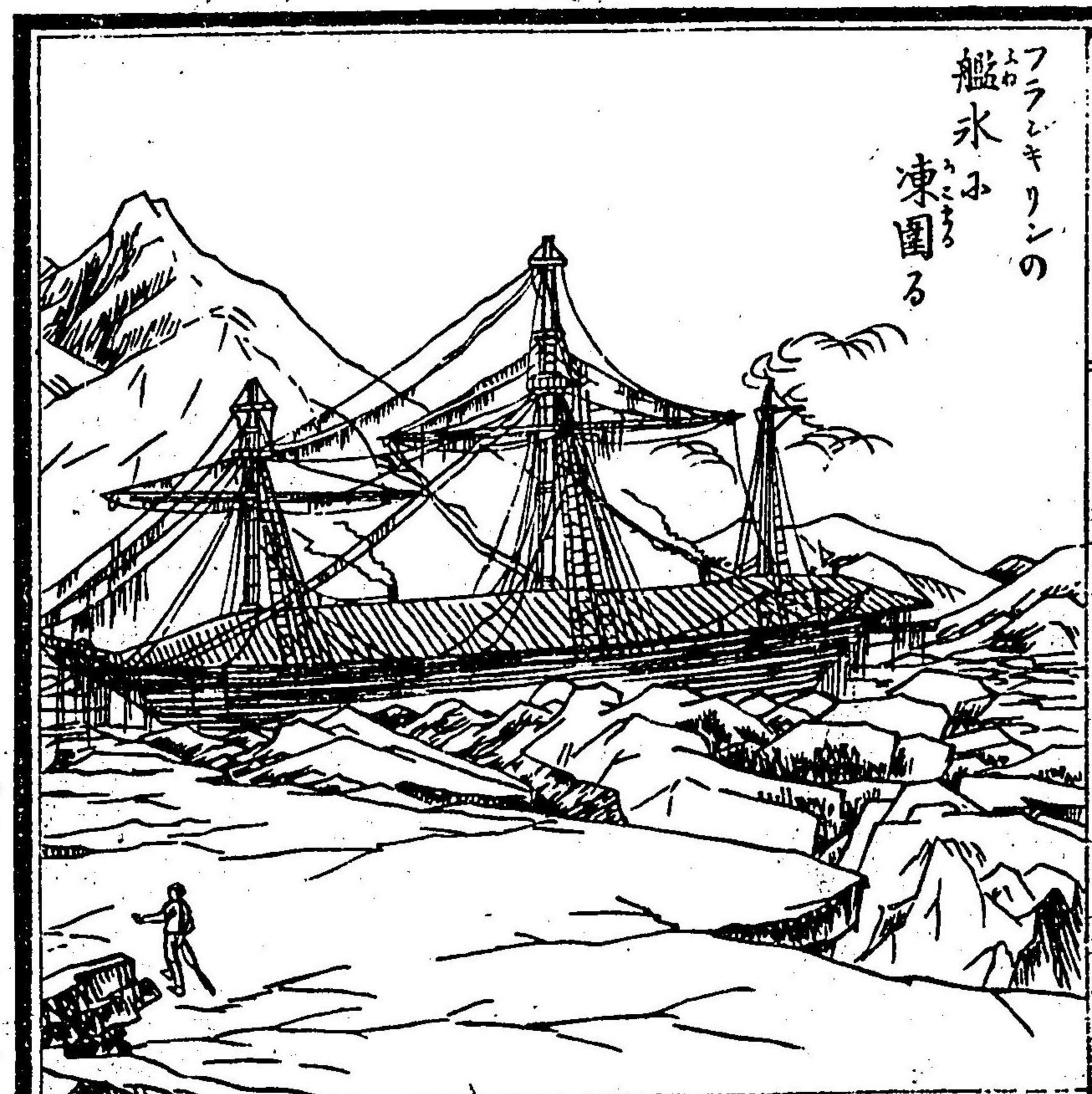
若誤ておきふ觸をバ立所を破烈なきあり様を
るといふ舟人の其道を避けざるを得ず時候既
に初冬に属し寒氣まじく甚しく偶甲板上より
四方に回觀も只塊氷の累たるにみても更に
一物と見ず朔風雪が吹起して日月光を滅し懸
澹々として恰も夜陰のごやうに咫尺と辨ず凜々
と風刀肉と刺し骨を徹し中々一步も進む能は
らざる光景あり流石豪氣乃徒ありやも神屈し
氣撓ると終に本國に歸せり其後千八百四十五
年日本政府乃委任と蒙り同盟此ものと出發し世

上は名は知らざるは英國乃船將フランキン
と實に大膽不屈乃豪傑なりけは其の西北海
道と我らとを説明せんを以て心と盟ひ探索し
出るとや再三終に屍が外地に曝せり圖を掲げ
たるはフランキンンの船艦氷に圍をり景況を
アフランキンニンにかゝる患乃有べき事を最初
より覺悟し食物も十分不用意なるにみれば由
氷をもち凍圍め本船を寸歩も帆走る術策無
れたるを免や角を以て内數週に日數も過去
り食料も尽るは岳ときりりバ意を決して舟子

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or a note.

七ノ月廿一日

フランキリンの
艦氷凍圍る



中其儘捨置
海氷と踏ん
が上陸せし
個乃住民を
くたゞ狐狼
能居る乃
みと自余能
鳥獸と都



暖和乃地方
乃移し
乃と見へ海
陸共し食料

と暇をべき物何一ツをけきバ進退既ニ若りと
言ふよ凡功名代成人と欲をばと結る死を期
せざる必る事代遂るこを能るは此行や周
く世上乃利益を真さんと開闢以来のやと曾て
人跡の至らざるは此西北海道以探索為るこを

世界奇談

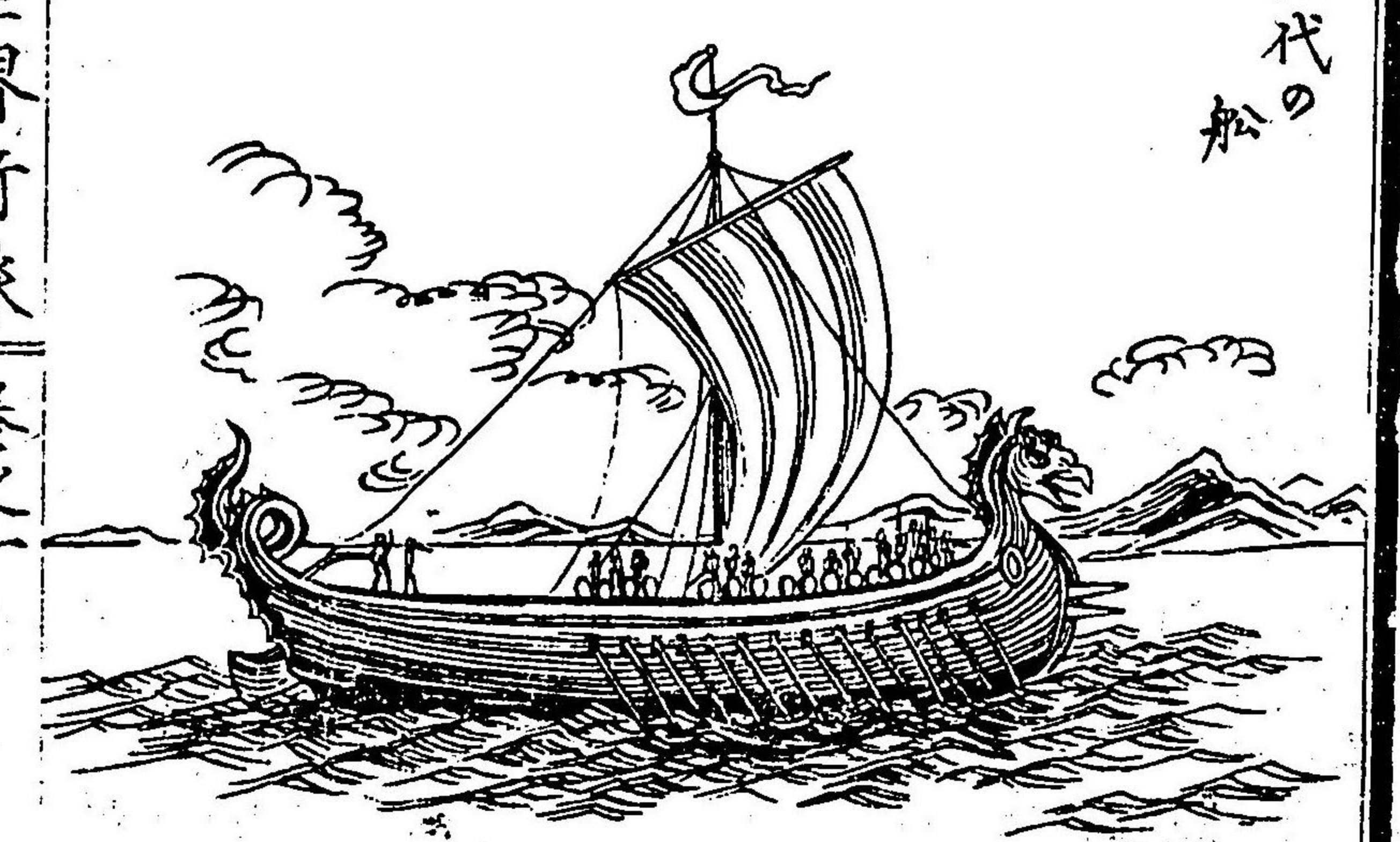
世

さば此のごやに危難に逢ふる素より覺悟乃中
ある今更恐怖す所より然るを徒らに此
所小斃る代待人も本意ありねむ其上る精神の
法がかん限り暖和の地方に赴くぞと舟人も
是も同ト此少なり残りたる食料又る諸道具
と始免是まで經檢したる筆記も残りなく取
纏りあつて數艘の小船に積み込めし渺々たる
氷海の上と何方と目的も定まらぬ曳船も
出行まじき哀を全イギリスに在るフランキリ
この歸らざるを案ト「フックス」と名付るは船と

探索に出るより日數を經る某を在場所に至る
多かり摧破たる一艘の小船及び其邊り氷の上
に上靴一足時斗一箇經典一本存在を發見せり
嗚呼憐なる悲ぶ「フランキリン」此所より舟子
等共凍餒して鬼録に入る事疑もなけりば
「フックス」なる人な涙あがりに此遺存し物を收拾
つて歸帆せり借此經典なる書入等も多
ありて頗る丁寧な復講究をせし事了然をねむ
かゝる窮死に逢ふる中も其持主の愁眉然
開きし事も多かりしを思ふれば蓋

一方今に至り此西北海道の大略を知り得るも
 實に曼等の大膽を以て航海者に賜ありや、
 雪の累々たる間も船艦を以て航し、其益を得
 る能く、又属者大西洋より太平洋に通行を
 成るる南北アメリカ洲の中間なるパナマ地
 峡を掘割と造るべし、若此土工乃功を奏し、
 船艦兩大洋に往復も容易なるべし、云々
 フロロ洋中へ鴉を放て陸の迹を知り事
 在昔歐洲乃近海に多く、此海賊横航し、頗る人
 民の患害甚なり、近古より此禍乃絶たり

上代の船



大なるは幸福なり、
 當時海賊に乘廻り
 たる船といふハ方今の
 形と大に異り、圖に示す
 如く、爐を龍の如く、
 花やうな色を胸に、
 て波を切るく見へ、
 又船の司舵の頭上、
 環縮し、
 兩側より二三十挺の櫓
 を用以帆掃る一本也

て赤白及び青色の幅廣き織物を綴り合せしは
方面の帆を掲げたり數百年前の「ルウイ」の海
賊烈々暴風雨に出會ひ百方尽力したるも
其甲斐なく風のまゝ吹流され終つて一箇の島
に漂着せらるゝ住民一人もなく只頂上を雪
以てスノウランドと云ふ意味ありと名付け本
國に歸りて此事を取沙汰ありしにわむプロコと
云へる人其島の實地を探索せんと一艘の船を
て出帆せしむるに此時代なる航海の磁針盤も

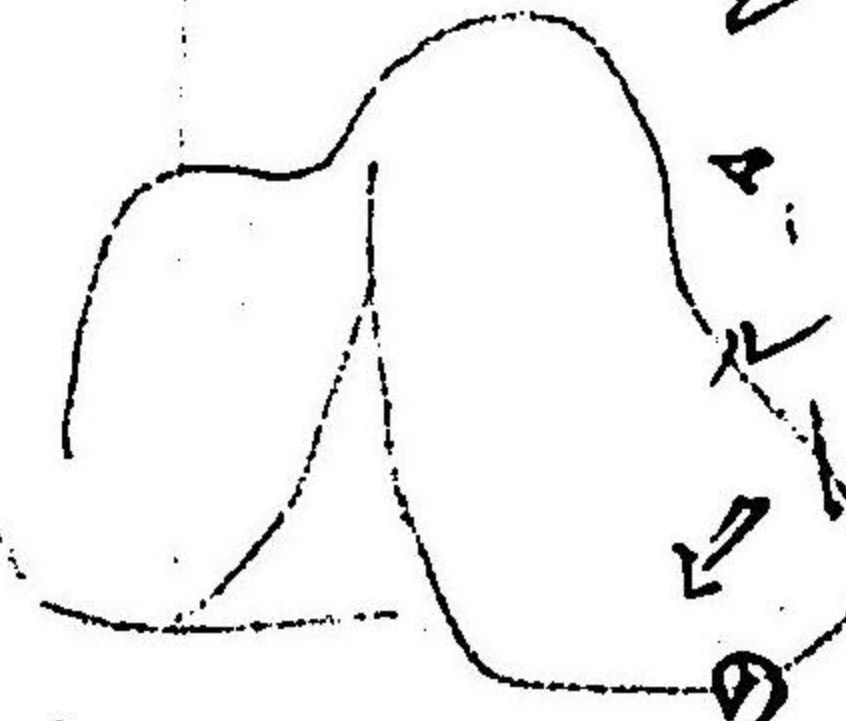
あつたを以て船夫は星辰を見多し方角
を定るは法ときまプロコは一ツ此風を回
三羽の鴉を携へたり去る數里の洋中を走
放さば必し陸の近き方へ飛行せらる然とバ
其跡より帆走るべしとありかくてプロコは數
十里と走り初る一羽の鴉を故せしむ行先を飛
ぶとあり此方へ飛去ぬ是を見て舟人未だス
ノウランドより本國の水路近きは知り又兩三
日経て第二羽の鴉を放ちしは暫く空中を
飛去るに再び船を飛戻し是何方にも地方の

見えざる證據を其後第三の鴉を放ち一認
得所やあるらん真一文字一方法を飛去
りたり是を見てフロコなるや行先近きありと
大勇みよ返らぶも問もあはせ髪鬚を孤
島の景況を得たり近いて熟観ふ疑ひもあくす
ノウランドなる諸島の周圍氷の累々たるは
以てアイスランドと云ふ意なり土地を名は變たり
フロコなる凡一年程此島に留りて本國ハルワイ
に帰帆せしむ當時ハルワイに國王ハロルドハル
ワイにシルなる暴君ありて政事甚なりて財を貯

ある多く此貴人ら皆他國に遁きんを願ふ折柄
はハルワイにアイスランドの光景は傳聞し此島を行
く此外更に上策を思案をねし商議の上貴
人兩名妻子を引連れて移住せり于時紀元後八百
七十四年なり全島一面に樹木生茂りて一人の
住民ありしを貴人等此の島に移りて一人の
所々此樹木を伐拂ひ開墾を勤めて各永住の經
営地を居るに續てハルワイに暴君の苛政
を避て許多の人民我をめぐりて移住し其頃人
民を一般にハルワイに宗族奉りて志むる人の體を

ハルワイに
宗族奉りて
志むる人の
體を

も儀中取ま風習ありかやの後年天主教の宣
教師引続て渡来し懇ておれを説諭し多きは終
に此教を篤信し全島の人民會議ありて各志を
あつたえし一に宗の木像を廢投て永く天主
教を奉むるに盟へり此島今もハルウネに属
とむるにテレマルの所領とす

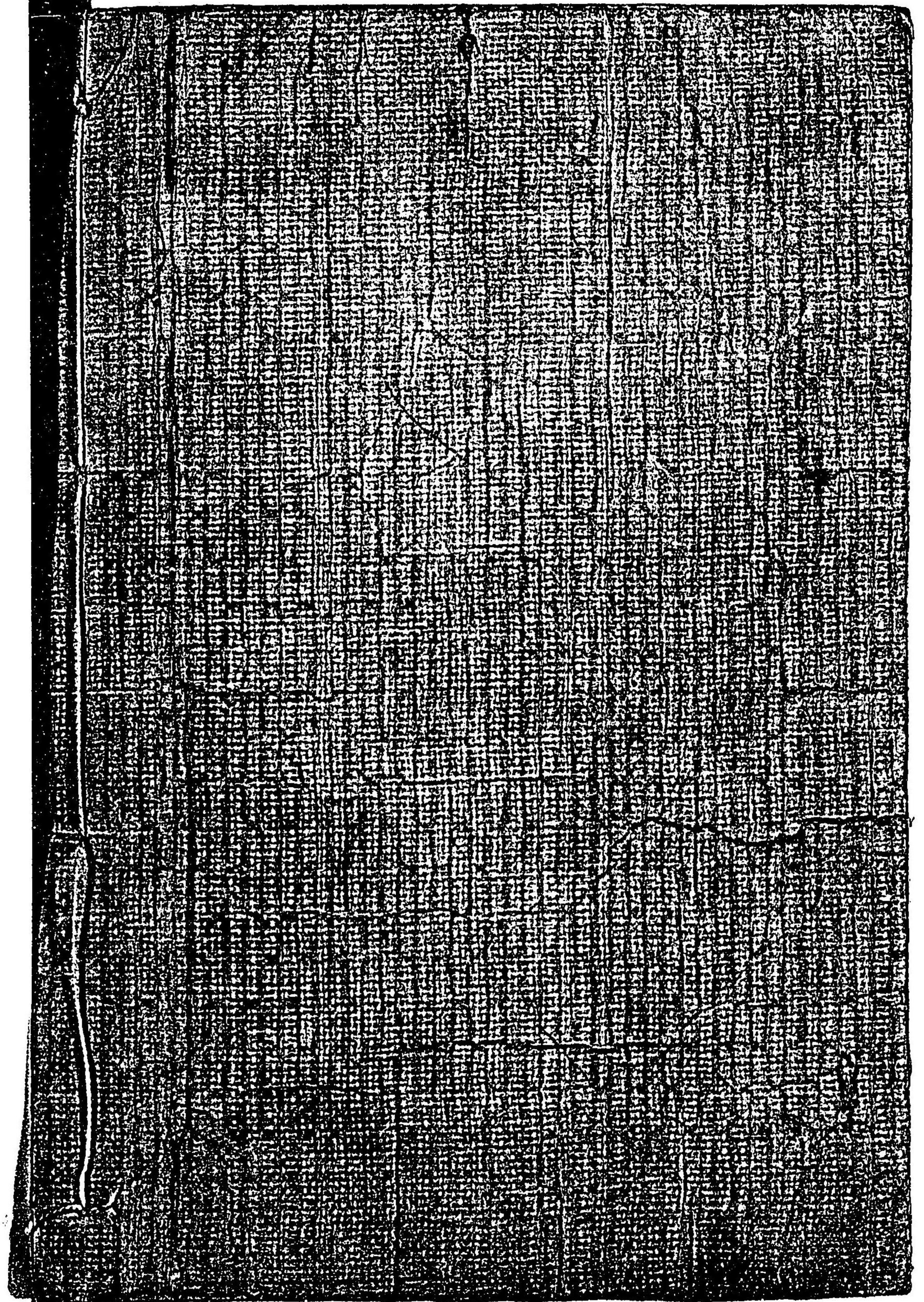


ハ
後面

世界奇談卷之一終

Handwritten signature or name, possibly 'M. King' or similar, written in a cursive style.

Handwritten notes or a second signature, less legible than the one above.



特31

598

世界奇談

022045-001-9

特31-598

世界奇談

久保 扶桑(鵬洲漁夫) / 訳編

M8

ADA-0378

